

九州の天理教 (概観)

九州はおちばからかなり遠い。飛行機や新幹線を利用すれば数時間で着くが、明治時代にあっては距離の面でも意識の面でも遠かった。したがって天理教が伝わるのに時間を要したであろうと考えるのが普通である。

ところが九州に初めて教会が誕生したのは明治 25 年であり、明治 28 年には九州 7 県全てに教会が設置された。四国、中国地方より 1、2 年遅いくらいで大差はない。また、おちばから遠く離れているにも関わらず、教祖にお目にかかった人がいた。おそらく九州の信仰者ではたった一人であろう。

明治 10 年の西南戦争で熊本城（当時は熊本鎮台病院）の石垣が破損したので明治 18 年修築のため大阪の北田常吉という天理教信者の職人がやってきた。北田は仕事の合間におたすけをし、重い肺病を患っていた友井常八をたすけた。

友井は北田が石垣修築を終え大阪に帰った後も命の恩人と慕い、翌年大阪を訪ねた。しかし北田はすでに故人となっており、師匠である泉田藤吉が友井をおちばへ案内した。友井は直接教祖にお目にかかったただ一人の九州人となった。

友井の懇望により熊本への伝道は明治 21 年頃から天龍講によってなされ、やがて熊本大教会や東肥大教会へつながる。

北田の師匠であった泉田藤吉は天龍講の熊本布教にやや遅れる明治 23 年、大分県中津へ布教し中津大教会、宇佐大教会の基礎を築いた。きっかけは中津のランプ商伏見三次郎が商用で大阪に滞在中、天理教の教えに触れたからだった。伏見はぜひ中津に布教に来て頂きたいと願い、泉田が応じるようになった。商都大阪に日本各地から人が寄ることが伝道につながった例である。各地と大阪との関係が伝道につながる事例は大変多い。

福岡県には明治 24 年、湖東系信者の近江商人堤丑松が天理教を伝えた。堤は蚊帳の行商で訪れた福岡県直方で商売の傍らおたすけをした。これをきっかけに信仰が根つき、筑紫大教会をはじめ西海、朝倉、鎮西の各大教会へ発展する。

以上の伝道は全て関西から伸びたものである。日本の西端にある九州へは関西、四国、中国など東からの伝道であることは容易に理解できる。関西より東からの伝道は少ない。

九州伝道を概観するため九州 7 県の教会数、人口、人口 10 万人あたりの教会数を挙げると次のようになる。

	教会数	人口	10 万人あたり教会数
福岡県	691 カ所	507.9 万人	13.6 カ所
佐賀県	137 カ所	84.7 万人	16.2 カ所
長崎県	194 カ所	141.7 万人	13.7 カ所
大分県	182 カ所	119.1 万人	15.3 カ所
熊本県	158 カ所	181.3 万人	8.71 カ所
宮崎県	139 カ所	113.1 万人	12.3 カ所
鹿児島県	133 カ所	169.9 万人	7.8 カ所

(教会数は『みちのとも』立教 175 年 12 月号、人口は平成 23 年 11 月総務省統計局)

福岡は人口も多いが教会数が群を抜いて多い。しかし人口比では佐賀と大分が多く、鹿児島、熊本は少ないことが分かる。後に述べるが鹿児島県の奄美諸島は人口比教会がかなり多い。

九州各県への伝道線がどこから伸びてきたのか、大まかに考

えてみよう。

最初に触れたことと重なるが、福岡県には滋賀県湖東系統から直方に伝わり、まず筑紫出張所（現大教会）ができ、この延長線上に西海、朝倉、鎮西などの教会ができる。現在では福岡県内に筑紫系統教会が 200 余りある。その他では高知県からの伝道が多く高知大教会、繁藤大教会など高知系統が多い。続いて撫養系統の香川大教会、防府大教会なども多い。また大阪の東神田大教会、奈良の岡大教会などからも直接、間接に福岡へ伝道されている。

佐賀県は岡大教会—東松浦分教会系統が断然多く、熊本、国名、鎮西が続く。なお福岡と佐賀の岡系統は最初平戸へ伝道されたものが時を経て佐賀と福岡で発展したものである。

長崎県では山口県から入った防府大教会—佐波分教会系統が多い。中でも中通分教会は五島の中通島周辺に固まって教会を有している。他に肥長、熊本の両大教会の教会も多く、芦津大教会が続いている。

大分県では前述の通り大阪の伝道者泉田藤吉のおたすけが早く、中津、宇佐の 2 つの大教会ができ、同じ系統から大分市分教会、安東分教会が出来た。さらに地理的に近い朝倉大教会の伝道による教会がかなりある。なお、安東は最初、(旧)満州に設置され戦後大分県に引き揚げた教会である。また中津部内の有力教会である二豊分教会は中津伝道のきっかけとなった伏見父子が設置したものである。

熊本県は東肥大教会の教会が断然多く、全熊本の 4 割に及ぶ。東肥は熊本大教会同様、大阪に住む天龍講布教師より始まった。東肥に続くのは筑紫、熊本、朝倉の各大教会である。

宮崎県は此花大教会、高知大教会、南阿大教会の教会が多い。なお、此花系は和歌山県に住む布教師が高鍋布教したものである。全体に四国と和歌山県からの伝道によると考えられる。

鹿児島県は南海大教会と芦津大教会の教会が多く、全鹿児島県の半数を占める。南海系統は九州本島にあり、芦津は奄美大島に多い。その他では筑紫、名京、甲賀、東肥の各大教会の教会もある。

ところで九州本島周辺には島が多い。島々への伝道状況はそれぞれの島によって差が顕著である。さほど大きくない、人口もけっして多くない島に教会が多い場合がある。瀬戸内にはそうした島々が多いが、九州にも教会の密集している島がある。例えば前述した奄美諸島には芦津大教会系統をはじめ 31 カ所の教会がある。しかも奄美大島のみでなく面積も人口も小さい喜界島、徳之島、沖永良部にも教会がある。また、同じく中通島を中心に五島列島には 20 カ所ほどの教会がある。同じ長崎県の壱岐、対馬も思いの外教会が多い。五島はほとんどが防府系統で、壱岐は筑紫系、対馬は全てが高知大教会と伝道線が単純である。これも島嶼における天理教伝道の特徴が現れていると言える。なぜこのようになったかを探求することが伝道調査には必要であるが、今回そこまでは触れない。

九州伝道は関西、四国、中国からが多いことは既に述べたが中でも大阪、奈良、滋賀、徳島、高知、山口の各府県から熱心な布教師がおたすけを展開した結果、今の九州があると言える。